

映画に  
宛てた  
ラブレター

2013年版

天見谷行人

「ようこそレッドカーペットへ」～ご挨拶に代えて～

僕は映画になんぞ全く関心がなかった。

映画の魅力を伝えてみたい。そう思うようになったのは、ふとしたきっかけからだった。

2004年のある日、ネットで偶然、映画の予告編を見た。

トランペットをくるくる回す女子高生達。

女子高生とジャズ？！

思わず惹き込まれた。

「スウィングガールズ」という邦画である。監督は矢口史靖という人だった。

何回も予告編を見た。

ここまで虜になってはしょうがない。

僕は何十年か振りに重い腰を上げた。

映画館という場所へ行く事にした。

行ったのはシネコンという巨大な映画集合施設。

ポップコーンの臭い。人の行列。チケット売り場はどこだ？

まるで初めて飛行場に行ったように右往左往する。

チケットを買い求め、劇場の椅子に座る。

ふかふかだ。座り心地がいい。悪くないな、と思っていたら予告編が始まった。

大きなスクリーン。巨大な画像と臨場感溢れる大音響に圧倒される。

「おお、これが最新の映画館なのか」とそれだけで感動した。

やがて本編が始まる。スクリーンで何十年か振りを見る映画。

僕は夢中になった。

そのあと、ぼくは「スウィングガールズ」を劇場で14回観るハメに陥る。

14回目を観た時には、既に僕は「映画」そのもののファンになっていた。

そして映画を劇場で鑑賞する事は「映画と観客の一期一会」である事を知った。

僕は「スウィングガールズ」という映画を14回観た。

結果、14回共に全く違った観客の反応があったのである。

劇場の雰囲気、まさに「空気感」は、同じ映画を観ているはずなのに毎回違う。

それを自分の眼とカラダで正に体感したのである。

だから映画はぜひ劇場で観るべきだと僕は思う。

それ以降「いい」と思った作品は、複数回、劇場で観る事にしている。

やがて僕は、観た映画の感動を、せっかくなので何か記録にとどめたいと思うようになった。そこで始めたのが、ネットでの映画レビュー投稿である。

2004年から始まり、現在に至るまで約380本程度の映画レビューを書いた。

それら過去の映画レビューも順次この「パブー」で公開してゆこうと思っている。

まずはもっとも、ホットな今年2013年、  
僕が「ついさっき観て来たばかり」の映画レビューを順次連載してゆこうと思う。  
これは僕にとって正に「映画に宛てたラブレター」であり、拙い文章を読んで下さる読者の皆様  
への「レッドカーペット」への「ご招待状」でもある。  
では、映画の世界をごゆっくりお楽しみ下さい。

ご案内役 天見谷行人

## 「シェフ!」～三ツ星レストランの舞台裏へようこそ～

2013年1月3日鑑賞

\*\*\*シェフ、最高の一皿でした!!\*\*\*



美味しかったねえ、この映画は。いい映画は、劇場を出るときのお客さんの顔で分っちゃう。レストランも映画も一緒。満足したお客には笑顔があるのです。

天才的な味覚と嗅覚を持った主人公、ジャッキー。彼はもちろん料理の腕も抜群。だけどこういう人に限って、なぜだか世渡りが下手なんです。

だから、どのレストランで働いても、もめ事を起こしてクビになってしまう。ジャッキーには妊娠している恋人がいます。まだ籍は入れてない。「結婚しよう」とプロポーズはしたいんだけど、なにせ生活が不安定。何とか恋人と安定した生活を送りたい彼は、やむなくペンキ塗りの仕事をしています。

そんなジャッキーにチャンスがやってきます。

料理番組まで持っている有名三ツ星シェフ、アレクサンドル（ジャン・レノ）が、助手を捜して

いたのです。やがて二人はタッグを組んで、レストランの三ツ星を守るため奮闘するというストーリー。

やはり、ミシュランの三ツ星の権威というのは大変なもので、もし、万が一☆がひとつ減った！なんて事になったら、もう大変。

ジャン・レノ扮する三ツ星シェフ、アレクサンドルは雇われの身です。レストランオーナーからは

「ひとつでも星を落としたら即刻クビだ」とプレッシャーをかけられているのです。このオーナーが、二代目社長でありまして、青年実業家なんですね。現場の事なんて何にも分ってないんです。だから、シェフに無断でキッチンの改装工事をしよう、客席の数を増やそう、なんて計画中です。そんな無理難題ばかり言うてくるオーナーにいい加減嫌気がさしていたアレクサンドル

。けど、  
「ひとつでも星を落としたら即刻クビだ」とプレッシャーをかけられているのです。このオーナーが、二代目社長でありまして、青年実業家なんですね。現場の事なんて何にも分ってないんです。だから、シェフに無断でキッチンの改装工事をしよう、客席の数を増やそう、なんて計画中です。そんな無理難題ばかり言うてくるオーナーにいい加減嫌気がさしていたアレクサンドル

「どうしよう、新しい創作料理を大至急作らないと☆が減ってしまう」

そこで三ツ星シェフ、アレクサンドルと助手ジャッキーは、最先端のフランス料理を食べさせると評判の、ライバル店へ偵察に行こうとします。

だけど料理番組まで持っているシェフは当然、「メンが割れてる」訳ですね。そこで二人はとんでもない方法を思いつくのですが.....。

まあ、それは劇場でお楽しみ下さいませ。



問題だらけの〈寄せ集めシェフ〉たちが、高級三ツ星フレンチレストランの厨房に、奇跡を起こす——。

シェフ!  
〜三ツ星レストランの舞台裏へようこそ〜

パリの空の下、料理に込めた「愛」と共にお届けする、美味しい人生の物語。

パリ有数の超高級三ツ星フレンチレストラン「カルゴ・ラガルド」は、20年間店の「三ツ星」を守り抜いてきたベテランシェフ・アレクサンドルのスランプで大ピンチ。次の審査会で星を一つでも失えば店の

何しろこの偵察シーン、僕が鑑賞していた劇場では全員大爆笑！！

まじで？ ジャン・レノって、ドラえもん以外にこんな事もやるの？ って感じです。もう、とにかく観て笑って頂くしかないですね。

そして、何より、スクリーンでとっておきのおいしそうな料理をたっぷり御堪能下さい。

お正月の初笑いにはピッタリですよ。僕は初詣のついでにもう一回観に行ってきました。

う～ん、満足、満腹の一皿という作品でした。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ダニエル・コーエン

主演 ジャン・レノ、ミカエル・ユーン

製作 2012年

上映時間 84分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

[http://www.youtube.com/watch?v=\\_9HS3XWGRZg&feature=share](http://www.youtube.com/watch?v=_9HS3XWGRZg&feature=share)

## レ・ミゼラブル

---

2013年1月23日鑑賞

\*\*\*大作を作ってみた感はあるけれど\*\*\*

前半のアン・ハサウェイの部分と、後半、学生、市民たちの武装蜂起の部分、これは見応えがありました。というか、途中は寝ちゃったのでよく分かんないのですが.....。

アン・ハサウェイは、よく演じていたと思いますよ。

以前の彼女の作品では、可愛いだけの女の子としての役柄が多かったようにおもいます。

今回は縫製工場に勤めるシングルマザーです。

貧しさのため子供を預けています。お針子の仕事も、夜の体を売る仕事がバレてクビになってしまいます。遂には貧しさから自分の髪の毛まで売ってしまう。そういう悲惨な境遇の女性をどう演じたら良いのか？

アン・ハサウェイの眼がすごかったんです。

「自分にはこんな役、演じられない！ もう、どうしていいか分からない！」という悲痛な表情。

僕はこれ、監督が狙って撮った表情だと思います。

そう言う精神状態になるまで、役者を追いつめるんです。

キツイことですけど、いい作品をつくろうという覚悟のある監督ならそれをやる。

邦画では李相日監督が「悪人」のとき、妻夫木君と、深津絵里さんにそういう追いつめ方をやりました。

後半の武装蜂起の部分、群衆劇としての見せ場ですね。僕は舞台版「レ・ミゼラブル」は観ていないのですが、おそらく映画作品にするより、舞台での群衆劇の方がいいんじゃないかとおもいました。

立ち上がる学生たちのうた声、たなびく三色旗。旗を振るたびにバサッバサッという音さえ聞こえる。それは映画では再現されていません。もったいないことです。とても効果的なのに。なんで入れなかったんだろう？ 旗の音を。

また、上映が始まってまず驚いたのは、スクリーンのサイズなんです。

これ、なんと、標準サイズなんです。ビスタサイズではないんです。監督のこだわりなんですか？僕はまるで一昔前のテレビを見ている様でした。いまいち狙いがよく分からなかったですね。

僕がカントクなら、これだけの大作なんだし、思い切って3Dミュージカルにしてみたいですね。舞台で大ヒットしている作品の映画化なのですから、映画にしか出来ないことをやるべきでしょう。

カメラアングルの移動、大規模なロケーション。そして編集。これらは舞台では絶対に出来ないことです。これだけいい題材なんだから、もったいないなあと思った作品でした。

\*\*\*\*\*

ちなみに、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の歌詞がとてつもなく過激な歌詞であることは、ご承知の方も多いと思います。7番まで歌詞はあるそうですが、一番とリフレインの歌詞はこちら

進め 祖国の子らよ  
栄光の日は来た！  
我らに向かって 暴君の  
血塗られた旗が 掲げられた  
血塗られた旗が 掲げられた  
聞こえるか？ 戦場の  
嚙猛な敵兵の咆哮が  
奴らは君らの元に来る  
君らの子と妻の 喉を掻ききるために！

市民らよ 武器を取れ  
隊列を組め  
進め! 進め!  
敵の汚れた血で  
我らの畑の畝を満たすまで！

\*\*\*\*\*

とまあ、こんな感じです。やはり、革命のお国柄なんですね。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆  
配役 ☆☆☆☆  
演出 ☆☆  
美術 ☆☆☆☆  
音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ



監督 トム・フーパー  
主演 ヒュー・ジャックマン、ラッセル・クロウ、アン・ハサウェイ  
製作 2012年  
上映時間 158分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

[http://www.youtube.com/watch?v=cl9gni\\_N\\_hk](http://www.youtube.com/watch?v=cl9gni_N_hk)

## ファースト・ポジション 夢に向かって踊れ！

---

2013年1月29日鑑賞

\*\*\*それでも君は踊り続けるのか\*\*\*

以前バレエの先生と話をする機会があった。

「先生、バレリーナって結婚を機会に引退って考えるものですか？」

一瞬、間があった。

こいつ、何をアホなことを訊いておるのだ、という感じで

「何言ってるの！！ たかが結婚でバレエ辞めるもんですか！！」

今度はこちらが「エッ?!」と絶句した。

バレエのセカイ等、何も知らない私には思いもつかない言葉だったのだ。バレリーナにとっては、人生の一大イベントである結婚も、「たかが」結婚なのである。彼女たちにとってバレエとは、人生そのものなのだ、と了承した。

食べるのもバレエのため。肉体トレーニングもバレエのため。普段の何気ない生活もバレエを中心に廻っている。

□ この作品は、バレエダンサーを目指す若者たちの、コンテストの様態と、そこに出場するまでを取材したドキュメンタリーである。

全世界レベルで行われる決勝の舞台、誰もが憧れるファイナリストになるためには、まずは各国で行われる予選を勝ち抜かなければならない。その予選ですら、凄まじくレベルが高いのである。

「もう、この子は天才」

「彼女は踊るために生まれて来たんだ」

なんて言うティーンエイジャー達が、それこそ掃いて捨てるぐらい集まってくる。



そんなコンクールに出場する本人は、もちろん緊張はしている。しかし、それ以上に、家族や専属のコーチの緊張がハンパではないのだ。自分たちが手塩にかけて磨き上げ、育てた才能。それが世間に認められるのか？ それとも今までやって来たことは全て無駄だと全否定されるのか？

実はこのコンクールは本人だけでなく、親と、指導者が、バレエにどれだけ真摯に取り組んだのかが判定される、評価される場でもあるのだ。それはまるで最後の審判さながらだ。

親が我が子のバレエに賭ける金の使い方も尋常ではない。

自分の子供をバレエダンサーにしようと決意した親にとって、「お金」は、もはや、タダの紙くずである。それこそ湯水のようにジャブジャブお金を使う。

子供のために専属の振り付けの先生を雇う。レッスンも広い専用ダンススタジオを丸ごと借りる。一足80ドルするトウシューズは一日で履き潰す高価な消耗品だ。

娘がコンクールを目指している会社社長は、娘の練習環境を整えるために自分の会社さえ移転させてしまう。

全ては愛する娘や息子のバレエのため。成功の切符を手に入れるため。

バレエに限らず、芸事を仕事にする、それで「飯を食っていく」ということはとても困難な道のりだ。実力はもちろん「運」も大切な要素だろう。

コンクールの映像は、観客として観ているこちらの胸まで苦しくなる。

とても残酷なのだが、ここで勝者と敗者がはっきり分かれる。

幸いにも選ばれた若者達にとっては、正に夢の切符を手にしたようなものだ。

「あなたは夢を追い続けなさい」と大人達から許された特権階級の仲間入りなのである。

彼らのある者は、バレエ団からオファーがあり、ある者には名門バレエ学校の入学許可、スカラシップが与えられる。

スポットライトを浴びることを許されるのは、ほんの一握りの若者達だけ。

彼らは夢の階段をひとつ上った。

しかし、まだ次の階段が待っている。

いま、舞台袖から、スポットライトのその先へ、まさに踊り出そうとする若いダンサー達。思わず声をかけたくなる。

「君の歩いて来た道は間違っていない。自分を信じなさい。このチャンスを楽しみなさい」

若いダンサーは夢への一步を今踏み出すのだ。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ベス・カーグマン

主演 アラン・ベル、ジュールズ・ジャーヴィス・フォーガティ、  
ミケーラ・デ・プリンス

製作 2011年 アメリカ合衆国

上映時間 94分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=c4BYOCglirQ&feature=share>

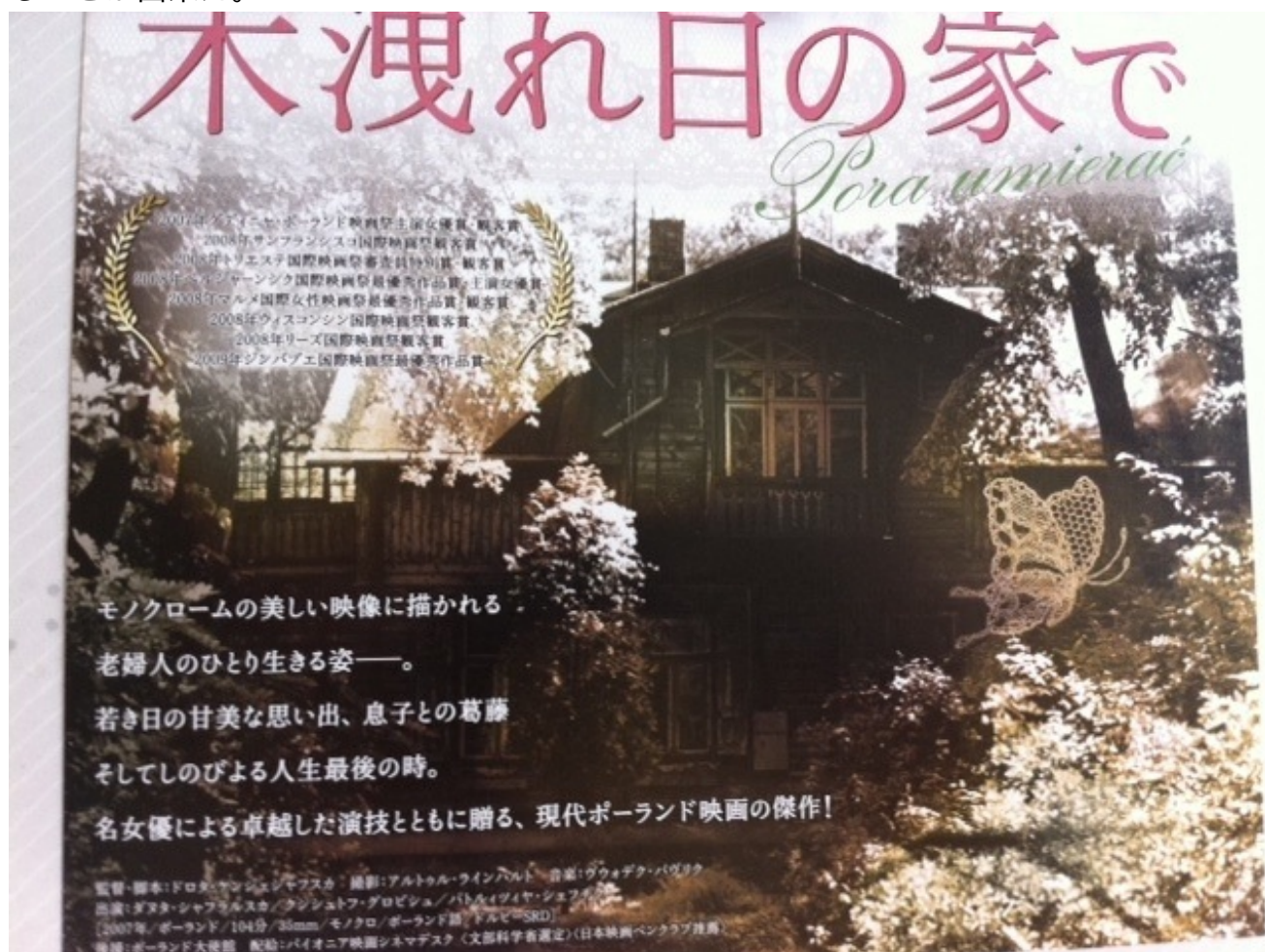
## 木洩れ日の家で

2013年2月4日鑑賞

\*\*\*モノクロームが映し出す「人間の枯れ方」\*\*\*

モノクロームの画面から、様々な色彩が鮮やかに立ち上がってくる。監督の絵心に思わず魅せられてしまう。

予告編を見て「これはどうしてもスクリーンで観てみたい」と思っていたが、ようやく劇場で観ることが出来た。



森の中の古びた二階建ての家。俗な世間から隔絶された様な佇まいをみせる家。主人公のおばあちゃんは、愛犬フィラと二人でここに住んでいる。一人息子は別に家を持っていて、離れた頃に訪ねてくるだけ。だから愛犬フィラは、おばあちゃんにとって、ただ一人の家族であり、子供であり、話し相手であり、頼りになる相棒でもある。

この犬の名演技には本当に感心させられる。喜び、怒り、悲しみ、好奇心、従順。ありとあらゆる表情を見せて、観客を楽しませてくれる。この何とも愛らしい犬、フィラの表情だけでも充分一本の映画が撮れる程だと、僕は本当にそう思う。

もちろんこの映画の魅力はそれだけではない。

主人公のおばあちゃんを演じるポーランドの女優ダヌタ・シャラルスカの表情に注目したい。

時折クローズアップで彼女の顔が映し出される。



彫刻を思わせる様な首筋の深いシワ。年齢を重ねた目元、口元の小じわ。そのシワが決して醜くは映っていないのだ。むしろ、シワの一本一本が無言の演技をしているかのようだ。

ひとりの女優、ダヌタ・シャフラルスカとして、演技とどう取り組んで来たのか？ また、一人の女性としてどう「老いて来たか？」その「枯れ方」が美しく「枯れている」のである。顔はその人の心の履歴書でもある。自分の人生とどのように真摯に向きあって来たか？ 残酷だが、それが顔に出るのである。

この女優さんには、老いてなお人を魅了する豊かな表情がある。

美しい歳の取り方とは、こういう人のことを言うのだと思う。

きっとこの人はのびのびとした少女時代を送ったに違いない。

心にたっぷりと滋養を受け取りながら育てて来た人であろう。

この作品は、極論してしまえばストーリーらしきものは、あってない様な物である。

おばあちゃんと愛犬フィラとの日常会話で、ほぼ作品が成り立っている。それでもこの作品は観る人を惹き付けて止まない。

カメラは、おばあちゃんの一軒家を取り囲む森の木々、その緑の木の葉を映してゆく。

光が木の葉にあたる。

木の葉たちの光の反射は、まるで光そのものが饒舌なおしゃべりをしているかのようだ。

刺す様なキラツとする光、周りを明るくする光、少し陰った光。ひっそりと控えめな光。木々の光の強弱をカメラに捉えるだけで、これだけ豊かな表現をなし得た、ドロタ・ケンジェジャフスカ監督の映像感覚は本当に素晴らしいと思う。

色あせて一見モノクロの様に見える人生になっても、光り輝く、色彩豊かな心を映しとってみせた監督の手腕。人が歳を重ねることの美しさ。女優ダヌタ・シャフラルスカの魅力をじっくりと堪能したい、逸品であるといえる。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ドロタ・ケンジェジャフスカ

主演 ダヌタ・シャフラルスカ、クシシュトフ・グロビシュ

製作 2007年 ポーランド

上映時間 104分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=mS8Q388syZs&feature=share>

2013年2月28日鑑賞

\*\*\*いやあ～、いい映画じゃないですかあ～\*\*\*

全然予想と違いました。

予告編や前評判では、スケベで品の悪い、テディベアを使ったブラックコメディーなんだろうと思ってました。

全然違った。

いい意味で予想を裏切られました。

映画への愛が一杯詰まった映画なんですね、これは。

特にB級アクション映画への、監督のこだわり、敬意、オマージュが一杯詰まっています。

B級アクション映画や、オバカ映画が大好きでよく見ていると言う「コアな映画ファン」には、もう、たまらなく面白い！と思います。



主人公の少年ジョンは、クリスマスに両親からクマのぬいぐるみをプレゼントされました。彼は人付き合いが苦手。友達が誰もいない。

「くまさん、僕と友達になってよ。一生の付き合いだよ」

そう言って彼はクリスマスの夜、ぬいぐるみのクマを抱いて、すやすやと眠りました。

彼の願いは神様に届きました。それはクリスマスの奇跡となりました。



朝、眼を覚ましたジョン。

「おはよう」

話しかけて来たのは、まさか！？ クマのぬいぐるみ！？

さあ、それから家族は大パニック。そして、生きて人間と話が出来るクマのぬいぐるみのニュースは、全米を駆け巡りました。テレビのワイドショーに単独出演。まるでハリウッドスター並みの大人気。ジョンと一緒に公園を散歩していると、サインを求められます。モッコモコの手でサインをする、ぬいぐるみのクマ、その名は「テッド」

そしてー

『一あれから四十年！！』じゃなかった。これでは綾小路きみまろさんですね。

.....あれから27年が経ちました。

ジョンはレンタカーショップに勤める、中年のオッサンになりました。相変わらず友達が少ない。でも、嬉しいことに四年間付き合っている彼女がいる。ロングヘアでかなりの美人。いま同棲中。二人だけの甘〜い濃密な時間を楽しんでいると、そこに割って入ってくるヤツがいる。それがいまやおっさんになったテッド。ぬいぐるみのクマも歳をとるんですね。

ジョンとは「オレとお前は一生友達」と誓った仲です。

だから、彼女のこと相談する仲だし、いっしょにイケナイ葉っぱを吸って、ラリってハイになったりする間柄です。



ジョンの恋人ロリーは、そんな二人を観て

「あなたのために言うのよ。テッドに出て行ってもらえないかしら」とジョンに持ちかけるのですが.....

この作品、僕が一番驚いたのは「音楽のセンスの良さ」なんです。

もうねえ、僕は絶賛したい！！

これは、こういう場面だから、こういう音楽を入れるべき。そして音楽を必要としないシーンは、絶対に音楽を入れちゃダメ！！

そう言うことがちゃんと出来てるんです。

これ、当たり前なようで、実はなかなかセンスが必要です。意外に難しいんですよ、皆さん。

ほんと、もう、まじめに他の監督は見習ってほしいぐらいです。

とってもお洒落で、気が利いていて、映画をより引き立てている。本当に音楽の使い方がうまいなあ〜、と唸ってしまいました。

この作品はB級アクション映画への愛が一杯詰まっています。

更にはラブストーリーあり、男と男のファイトシーンあり、サスペンスあり、何とカーチェイスまであるという、ハリウッド映画の美味しいところ全部がこれ一本にギュッと詰まってる。

もうこれはフルコース楽しめるオトナの映画なんですね。

偏見など持たず、是非、映画館で楽しんでみて頂きたい作品です。

なお「F●CK YOU!」「Bitch!」なんかの汚いコトバが連発されるので、カップルで観に行ってはマズい、と仰るレビュアーの方も結構いらっしゃいますが、僕は個人的に、意外にカップルで観に行っても、盛り上がるんじゃないかと思えますよ。心の広い女性であれば……許してくれるんじゃないかと。

是非、彼氏、彼女と、お二人で笑いながら鑑賞してみてください。

僕はもう一回観てもいいかなと思える作品でした。

R15+指定なので、「よゐこ」の皆さんはまだ観ちゃダメよ。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 セス・マクファーレン

主演 マーク・ウォールバーグ、ミラ・キュニス

製作 2012年 アメリカ合衆国

上映時間 106分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=nfZQYAtnrRE&feature=share>

2013年3月7日鑑賞

\*\*\*見える障害、見えない障害\*\*\*

劇場でこの作品を観ている最中、思うところありまして、あまり作品に集中出来なかったのです。

この作品は精神障害者の犯罪と社会復帰という、とても重いテーマに挑んだ作品なんですね。それを主人公のお父さん、ロバート・デ・ニーロのヒョウヒョウとした演技で、全体の重苦しいトーンをうまく中和させている。そんな味付けの作品だと思えました。

ロバート・デ・ニーロが演じるお父さん、何ともいい味出してます。仕事を辞めちゃって、今はギャンブルにハマってるダメダメなオヤジさんです。

彼は、犯罪を犯した息子パット（ブラッドリー・クーパー）を受け入れています。ようやく出所して来た息子パット。この物語の主人公です。彼は裁判所から精神障害者であると認定されます。もともとは妻の浮気の現場を生で目撃してしまったショックから、心にキズを負ったのです。彼は医療刑務所で治療を受けながら、刑期を過ごすことになりました。

（アメリカの司法制度や医療刑務所のことはさっぱり知識がありませんので、よく分かりませんが）

出所して来た彼に妙につきまってくる女性がいる。名前はティファニー（ジェニファー・ローレンス）

実は彼女もまた、若いのに夫を突然の事故でなくし、心に大怪我を負っている。彼女の唯一の心の支えがダンスを踊ること。

「今、ダンスのパートナーを捜してるの。一緒にダンス大会に出てくれない？」とティファニーはパットに持ちかけるのですが.....。

というのがこの作品のおおよその輪郭です。

\*\*\*\*\*

さて、これ以降は映画に直接関係ございませんので、あらかじめお断りしておきます。

実は僕も精神障害を持っております。「うつ病」と診断され、市から障害者3級に認定された「精神障害者」です。障害者手帳というのも持っている。胸張って言うことでもないでしょうが、「れっきとした」「障害者」という”カテゴリー”に入る人間です。

実は障害者には、「見える障害」と「見えない障害」を持つ人がいるのです。

身体障害者は「眼に見える障害」です。誰が見ても「ああ、障害者だね」と一発で納得出来る。

やっかいなのは「見えない障害者」

代表的なのが心の病、精神障害ですね。

実は「精神障害」と一言で片付けてしまう、一括りにしてしまう、そのこと自体が僕には恐ろしいのです。

「精神障害」というひとつのカテゴリーのなかに、実に様々な症状の心の病があるからです。

実は「精神障害者」同士でさえ、病名が違えば、さっぱり相手の症状が理解出来ないのです。

この映画の主人公は「躁うつ病」です。

僕は「うつ病」ですが、この作品の「躁うつ病」の症状はさっぱり理解出来ません。その行動パターンに共感出来ないのです。

他にも「パニック障害」「統合失調症」最近では「新型うつ病」なんて言うのも出てきました。これらの病気も「うつ病」の僕からは理解不能なのです。ここに「精神障害」というひとつのカテゴリーでくくってしまう怖さがあるのです。

なお「てんかん」も見えない障害ですね。僕は以前てんかん発作の障害を持つ年配のご夫人と、ある映画会に行ってそのあとお茶を飲んで話をしたことがあります。

よく笑う、ほがらかで楽しい人です。とてもじゃないが、全く障害があるようには見えない。どこからどう見ても明るい近所のおばちゃんです。ところが.....

「私ねえ、太陽の光がダメなの。いつ発作が起きるか分からないから、日中、外で用事があるときは、ヘルパーさん頼んで、一緒に付き添ってもらわないと危なくて歩けないの」

そう言えば僕がお会いした日は、今にも雨が降りそうな曇り空の夕方でした。

この方や僕のように、表に見えない障害を持つ人達がいるということを、ちょっと気にとめておいて頂くとうれしいです。

そして僕を含め多くの「見えない障害者」たちが、逃れ様のない”偏見の眼”にさらされていることも知っておいて下さい。

更には、「眼に見えない障害」の残酷さは「眼に見えないがゆえに」両親、兄弟からも理解されず「全く孤立してしまう」という苦しみを伴います。

この作品がそう言った「見た目には分らない障害者」がいるという気づきを生むきっかけになればいいなと思いました。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 デヴィッド・O・ラッセル

主演 ブラッドリー・クーパー、  
ジェニファー・ローレンス、ロバート・デ・ニーロ

製作 2012年 アメリカ合衆国

上映時間 122分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=pp3e3twHiV4>

## 二郎は鮨の夢を見る

2013年3月9日鑑賞

\*\*\*二郎と弟子たちが奏でる「SUSHI」のシンフォニー\*\*\*

NHK「プロフェッショナル・仕事の流儀」という番組で、ある鮨職人を取り上げていた。その人の名は「小野二郎」

黙々と鮨を握る姿。

僕はハッとってあわてて録画した。

その後、何回も何回も観た。

何度観ても新たな発見がある。

仕事とは何か？

職人とは？

極めるとはどういうことか？



これと全く同じことを、僕はあるドキュメンタリー映画で、今も学び続けている。

それは「セカイのオザワ」と呼ばれる、指揮者小澤征爾さんのドキュメンタリー映画「OZAWA」（1985年、デイヴィッド&アルバート・メイズルス監督作品）である。

この作品を創ったのがピーター・ゲルブさん。そして本作「二郎は鮨の夢を見る」を創ったのが、まさにその息子さんのデイヴィッド・ゲルブさんなのだ。

「一流というのは二流に飽き足りない人のこと」

昔そんな言葉を聞いたことがある。

二郎さんの鮨は「国宝にすべき」とも言われる。

あの「フレンチの帝王」と呼ばれるジョエル・ロブションも

「日本に来て一番楽しいのは、二郎さんのスシを食べているときですね」と言う。

二郎さんのお店のメニューは「おまかせ」というコースだけだ。「プロフェッショナル・仕事の流儀」や本作で披露される、二郎さんの鮨のコースは、まさに鮨のフル・オーケストラが奏でるシンフォニーのようだ。

さりげない第一楽章から始まり、徐々にふくよかさをます第二楽章。鮮やかな場面転回を見せる第三楽章。それはまるで巧緻な建築物のように組み立てられてゆく。そして最も盛り上がるクライマックス。最終楽章。五感と魂までひとつ上の次元まで持っていかれてしまう。そして豊かな余韻を残すエンディング。

気づくと、“ふうわり”と現実の世界に戻って来ていることに気づかされる。

本作で使われるモーツァルトのピアノ協奏曲。

「SUSHI」と「モーツァルト」のまさかのコラボレーション。

だが「二郎さんが握る鮨」だからこそモーツァルトと見事に融和するのであろう。

小野二郎さんはその「SUSHIオーケストラ」の指揮者ではない。

彼は鮨を握る「鮨職人」であり、自ら「SUSHIシンフォニー」を奏でる「コンサートマスター」なのである。

小野二郎さんは現在87歳。

厚生労働大臣から現代の名工として表彰された職人さんであり、世界最高齢の現役三ツ星シェフとして、ギネスブックにも認定されている。まさに世界の料理界から注目される日本人だ。

そんな二郎さんにスポットをあてて、ただ賞賛する映像作品を作ることはたやすい。この作品の素晴らしさは、二郎さんだけをフォーカスするのではなく、日本の食文化である「鮨ないしは寿司」とその食文化をどのように後世に伝えてゆくか？ ということも描いているところにある。

小野二郎さんが到達した「心」「技」「体」をどうやって弟子達に伝えてゆくのか？

いまや「SUSHI」は世界中で食されるグローバル化された食文化だ。

だが世界中にある「SUSHI・レストラン」の中で、芯のブレない「本当の本物のスシ」を食べさせる店と呼べるのは、ほんの一握りだろう。その頂点にあるのが日本の東京銀座にある「すきやばし次郎」であり「二郎握り」と呼ばれる匠の技、「スシの神様」が愛する「神の手」を持つ小野二郎さんなのである。

小野二郎さんと、僕の大好きな小澤征爾さん、お二人に共通していることがある。

それは「お客様に見てもらおう部分は5%だけ」ということだ。残りの95%は影の悪戦苦闘なのだ。

二郎さんも小澤さんもしっかりと下ごしらえ、仕込みをやっているのである。

極上の味、極上の音楽を生み出すためには、客席からは見えない舞台裏での悪戦苦闘があるのだ



。そして二郎さんも小澤さんも、その苦勞を敢えて表に出そうとしたがらない。見せたがらない。こういう人を本物のプロフェッショナルと呼ぶのだと思う。

ドキュメンタリー映画である本作も「OZAWA」も、敢えてその聖域に踏み込んだ。取材はOKされた。それは監督の熱意と粘りはもちろんのこと「作品を作る意義」を相手が認めてくれたからだ。だからどちらの作品も後世に残せる、貴重な映像記録となったのだ。

二郎さんは、今、その95%の部分を若い弟子達に任せている。若い人達に任せることで「二郎の鮓」を後世に伝えるためである。



### 鮓の向こうに人生が見える

2012年3月、ニューヨークにあるわずか2館のスクリーンで全米公開をスタートさせた「二郎は鮓の夢を見る」。アメリカ人監督による、日本の鮓と職人をテーマにしたそのドキュメンタリーは、瞬く間に口コミで評価を上げ、最終的には興行収入250万ドル超というドキュメンタリー映画としては異例の大ヒットを遂げた。その噂はやがて全米から世界へと飛び火。遂に作品の舞台となった日本のスクリーンへと凱旋を果たす――。



玉子焼きを任せてくれるまで、何と十年を要する?!という「すきやばし次郎」での修行。

この作品を観ていて嬉しいのは、何としてでも寿司の最高峰を目指そうと悪戦苦闘している、若い見習い職人さん達が育っていることだ。更に嬉しいのは、若い見習い職人さん達の姿と肉声を、監督が、この作品にとって欠かせない部分として、映像化してくれたことだ。

二郎さんの握りは「手当て」と呼ばれる下ごしらえが施される。これに途方もない労力をかける。修行に10年かかる玉子焼きに始まり、酢で締める鮓、藁で燻すカツオ、アワビの煮込み方、海老の茹で加減、アナゴの焼き加減。それらの工夫、ノウハウの継承。

しかし、これだけのことをやっても、お客さんの前に出せる「ハレの舞台」に上げられるネタは、その一部でしかない。

ドキュメンタリー映画「OZAWA」でもオーケストラのリハーサルで真剣勝負している指揮者、小澤氏と、若者を指導する教師、指導者としての小澤氏の両面の姿が描かれている。

製作者のゲルブ氏一家は、一流のアート感覚をDNAとして引き継いでいるのであろう。本作でも

、その映画作りの視点が、日本や日本の食文化、その奥深さを捉えることに成功している。そしてなにより「鮫職人」小野二郎と、ひとりの人間としての小野二郎に惚れ込み、敬愛の念を持つ、監督の気持ちが痛い程伝わってくる。そんな二郎さんは今日も無愛想に黙々と鮫を握る。西洋の心と日本の心が溶けあい、見事なハーモニーを奏でた本作。ドキュメンタリー映画の傑作の誕生である。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆  
配役 ☆☆☆☆☆  
演出 ☆☆☆☆  
美術 ☆☆☆☆  
音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 デヴィッド・ゲルブ  
主演 小野二郎、すきやばし次郎スタッフ、山本益博  
製作 2011年 アメリカ合衆国  
上映時間 82分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=Bwy2ubbQ-2s>

2012年3月11日鑑賞

\*\*\* これがデンゼル機長の神業さ \*\*\*

久々にデンゼル・ワシントンらしい、人間ドラマに焦点を絞った重厚な作品だ。  
人間ってのはありきたりなアクション映画のヒーローみたいに単純明快じゃない。  
何が善で何が悪か？

その境界線ってどこだろうか？

そして善人にも、悪人にもなってしまう、そんな自分って言うヤツはいったい誰なんだ？  
その問いを観客へ投げかけるラストシーン。

映画作品として見事な「着陸」を観せてくれている。

デンゼル・ワシントン演じるウィトカー機長。

彼は経験豊かな機長だ。パイロットとしての才能はハンパじゃない。

彼なら旅客機なんぞ、それこそ鼻歌気分で片手運転出来るぐらいだ。



でも機長としての仕事は楽じゃない。

3日で10往復は、かなりのストレスを伴うのだろう。

彼はそのストレスからだろうか、よく酒を飲む。飲まなきゃやってられない。

フライトの朝、親しくなったCAさんとベッドイン、頭は二日酔いでフラッふら。

目覚めにコカインという鼻薬をシュッと一発決めりゃあ、もう、気分はヒーローでスーパーマン。  
シャキッと「ウィトカー機長殿」の姿に変身だ。このあたりのスピーディーな編集はお見事。

こういう、黒人のエリート層を演じさせたら、本当にデンゼル・ワシントンの独壇場だなあ〜とつくづく思う。

さて、離陸した旅客機は悪天候の中を飛んでゆく。機体がガタガタ揺れる。まるで遊園地のジェットコースター並みだ。だが、そこは熟練パイロット、ウィトカー機長である。雲の隙間を素早く見つけ、乗客に希望の太陽と青空を見せ付ける。

乗客やんやの大拍手。まさに千両役者ウィトカー機長だ。

まあ、こんなことぐらい朝飯前にやっちゃうのが、ベテランパイロットの経験と勘なのだろう。だが、それも束の間。機体にトラブル発生。

エマージェンシー！！

緊急着陸。

下がる、下がる、高度は下がる。

コントロール出来ない。あわや墜落！！

という局面でウィトカー機長はまさかの奇跡を起こす。

旅客機ではあり得ないアクロバット、背面飛行で、機体を立て直し不時着させるのだ。

気がついた時、彼はベッドに寝かされていた。

彼の目の前には弁護士がいる。

「機長、あなたの血液からアルコールが検出されました」という報告が.....。

彼はアルコールに溺れていた。辞めようと思ってもどうしても辞められない。

妻と一人息子よりも「酒」と「コカイン」を選んでしまった人間なのだ。彼は誰よりも自分のダメさ加減を分っている。だからよけいストレスが溜まる。そう言う複雑な人物像をデンゼル・ワシントンは実に丁寧に演じている。



監督×デンゼル・ワシントン  
立つ名匠と名優が贈る、衝撃と感動の物語。  
んだ名作「フォレスト・ガンブ／一期一会」の...

ロバート・ゼメキス監督は「フォレスト・ガンブ」のとき、観客に実に理解しやすい主人公を描いた。

自分にも他人にも正直であること、誠実であることは、たとえ知的障害があったとしても「人間として尊い生き方なのだ」ということを、老若男女、誰がどう観ても分るように、優しく、かみくдукように描いた。

娯楽性も申し分なく、観終わった後、すがすがしい余韻が残る、傑作であると思う。

さて、今回の「フライト」はどうでしょうか？

この作品は100人の観客がいれば、100通りの、全く異なる印象、全く異なる感想を持つことだろう。

そう言う作品なのだ。

監督は万人ウケはあえて選択しなかったのだ。

この作品は編集面でやや冗長さは感じられるが、決して駄作なんかではない。

正直、デンゼルファンの僕としては、最近の彼が結構、駄作としか言い様がない作品に、度々出ていることが気になっていた。だが、デンゼルの名誉とデンゼルファンのプライドに賭けて、これだけははっきりしておく。

「本作は駄作なんかじゃあない」

この作品は観る人の「人生の経験値」に比例して、感動も深まってゆく作品なのだ。

ロバート・ゼメキス監督はそう言う作品にあえて創り上げた。だからこの作品を小中学生に見せても、ただの「アル中で薬物中毒のヤバい機長の話し」としか受け止められないだろう。

映画の終盤、ウィトカー機長は事故の公聴会に出席する。彼はそこである決断に迫られる。

それは自分で自分を裁く行為だ。

彼は冷静に、厳格に、自分を裁く。

それが人間として生きる道なのだと彼は決断した。

こんな難しい心理状況、それをデンゼル・ワシントンはまさに人間心理のアクロバット飛行のように演じてくれた。

彼はこの作品を操る、見事なパイロット、操縦士だった。

もしあなたが飛行機オタクで、派手な飛行機のアクロバットやスペクタクル、パニックの興奮をこの映画に期待するのであれば、毎月のように公開される、ハリウッドのアクション映画を観た方がいい。

コカ・コーラと（これもコカインからきているんだよね）ポップコーンをバリバリ頬張りながら楽しむ事をお勧めする。

本作は残念ながら、そちらの方面へは「フライト」しないのである。

しかし、もしあなたが人間を観察することが好きで、人間はどう生きるべきかを心の隅っこにでも忍ばせている人であり、そして映画からそのきっかけを学びたい、と思っている人であるなら、僕は、そんなあなたに、この作品を強くお勧めしたいと思う。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ロバート・ゼメキス

主演 デンゼル・ワシントン、ドン・チードル  
ケリー・ライリー

製作 2012年 アメリカ合衆国

上映時間 138分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=jEKF2EfSBQk>

## 愛、アムール

2013年4月4日鑑賞

\*\*\*君こそ、愛ゆえに\*\*\*

本当はこの映画レビューは書くべきではないのだろう。

正直あまり感心しなかった。

カンヌのパルムドールに輝いた作品。

カンヌで賞をもらった作品はハリウッドのアカデミーの対極にある様な作品が受賞する事が多い。

映画ファンを自認している人間として、時には難解な映画を見て鑑賞眼を鍛えるということで、ほとんど義務として観た。

本作は、年老いた夫が、体の不自由な妻を介護する話。

妻は美しいピアノ教師であった。立派なピアニストも育てた。

そんな彼女がある日、意識をなくしてボーッとしてしまう。



夫は彼女の異常を発見する。医師に相談すると手術したほうが良いと言う。

成功率は95%だ。

安心していい。

嫌がる妻を説得し手術を受けさせた。

結果。

彼女は残りの5%のカテゴリーに入ってしまったのだ。

体に障害が残る。ほとんど歩けない。そんな妻をみて、夫は献身的な介護を始めるのだ。

僕が昨年見た映画で「最強のふたり」という作品がある。

こちらの作品は、首から下が全く動かない大富豪を、不良黒人青年が介護する話。これは実話だ。社会的地位や、人種、そして障害を乗り越えて、二人の間に友情が芽生えると言う、観終わった後、スカッと爽やかな作品に仕上がっている。エンターテインメント性も申し分なく楽しめる作品だ。

本作「愛、アムール」は正に真逆と言っていい。

難解であり、楽しくもなく、暗いトーンの商品。

観終わった後、つらい感覚が残る。

お金を払ってなぜつらい事を経験せねばならないのか？とさえ思わせる作品である。観客もそれぞれ、生き辛い人生を背負って、それでも映画館に足を運んでいるのである。

僕が疑問に思ったのは、そもそも、この作品を映画で表現する必要があったのだろうか？ということだ。

映画で表現するという事は、スクリーンで「動く画」を見せる「必然性」がなければならない。

ぼくにはこの作品に関して、何も必然性を感じなかった。

小説で表現した方がいい作品であろうと思われた。

ミハエル・ハネケ監督が、あえて絵を見る楽しみに挑戦していないように思えて仕方なかったのである。

例えば、二人の出会いや恋愛シーンを回想で観せる、とか、美しく若かった妻が、流麗にピアノを弾いてみせるシーン等、僕が監督なら是非入れたいと思う。

しかし、本作では、そんな観客を楽しませる、うっとりさせるようなシーンは全くないのだ。せいぜい数年前の回想シーンがあるだけだ。





ここ数年、映画館に通い続けて思うのは、老人を扱った映画が極端に多くなっていると思える事だ。少子高齢化は日本の専売特許の様な感じがするが、邦画で老老介護を真正面から捉えた作品には出会ったことがない。もちろんそんな作品を作ろうとおもってもどの映画制作会社も却下するだろう。興行収入が見込めないからだ。「売れる」と予想出来るネタしか映画化しないというのは、映画界にとって自らの可能性を否定する行為だと僕は思う。

しかし、ドイツ人監督ミヒャエル・ハネケ氏は世界に向けて老老介護問題を本作で発信した。この作品で特筆すべきなのは、体が不自由になった妻を演じた女優エマニュエル・リヴァのあまりにもリアルな演技である。

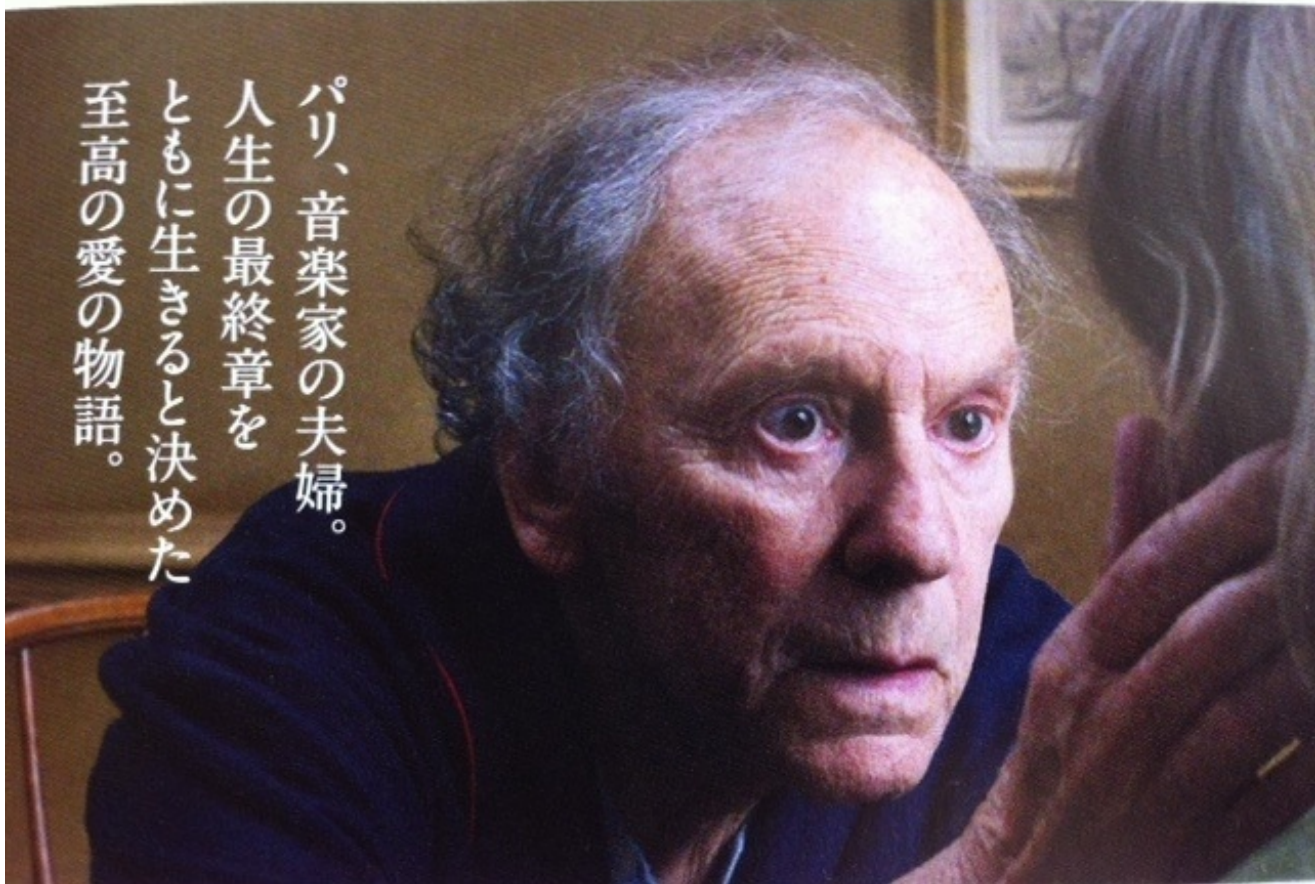
体が動かなくなってから、次第に生きる意欲そのものが衰えてゆく様を、迫真の演技で表現してみせた。

また、本作では、二人の部屋に鳩が迷い込むシーンがある。

これはおそらく監督にとって、命の象徴として表現したかったのであろう。夫はこの鳩を窓から逃がしてやる。夫にはそう言う命に対する優しさがある。

ところが、妻の介護を続けてゆくうちに、夫は変貌してゆくのである。夫は美しいピアニストであった妻を、美しいままの姿で閉じ込めておきたかったのだろう。

物語の終盤で夫が取る行動は、観客である我々が、それぞれの立場で受け止めるしかない。ミヒャエル・ハネケ監督はそう言う問題提起を観客に投げかけた。



パリ、音楽家の夫婦。  
人生の最終章を  
ともに生きる決めた  
至高の愛の物語。

主人公の夫、彼は芸術を愛する美意識を持ち合わせていた。だが、それ故に、醜いと言いやがない現実生活に悲嘆した。また、自分の愛と美へのエゴが、衝動的な行動へ駆り立てたのだろう。エゴとは愛の表現の側面でもあるのだと、僕は思う。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆☆☆
- 配役 ☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆☆
- 美術 ☆☆☆
- 音楽 ☆☆☆☆
- 総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

- 監督 ミヒヤエル・ハネケ
- 主演 ジャン＝ルイ・ランティニアン、  
エマニュエル・リヴァ
- 製作 2012年 フランス/ドイツ/オーストリア
- 上映時間 127分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

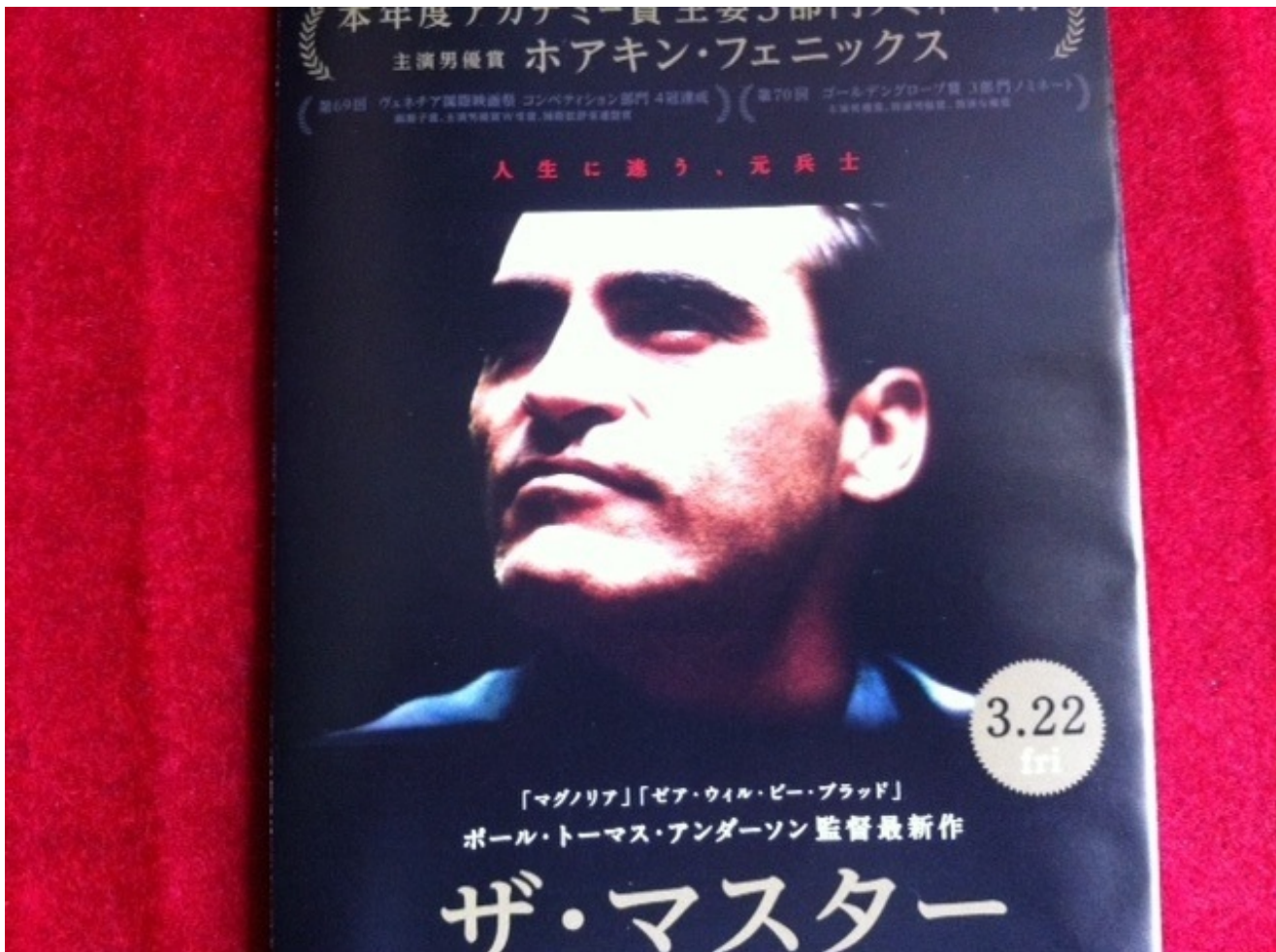
<http://www.youtube.com/watch?v=626RPRSHp0>

2013年5月3日鑑賞

\*\*\* 彼こそ我が全て、でいいの? \*\*\*

フィリップ・シーモア・ホフマンの演技が見たくて映画館に足を運んだ。今回彼が演ずるのは、心理療法家であり、哲学者であり科学者でもあると言う、ちょっと怪しいカルト集団の中心人物。

なお本作の主人公は彼ではない。その心理療法家に心酔してしまう男フレディ（ホアキン・フェニックス）が主人公である。



フレディは第二次大戦に従軍した。そして心にキズを負った。そのキズが癒える事なく復員。やがて彼は写真技師として仕事を始める。高級デパートの一角で来場客相手に

「はい、撮りますよ、笑って～」

パシャッとシャッターを切る。

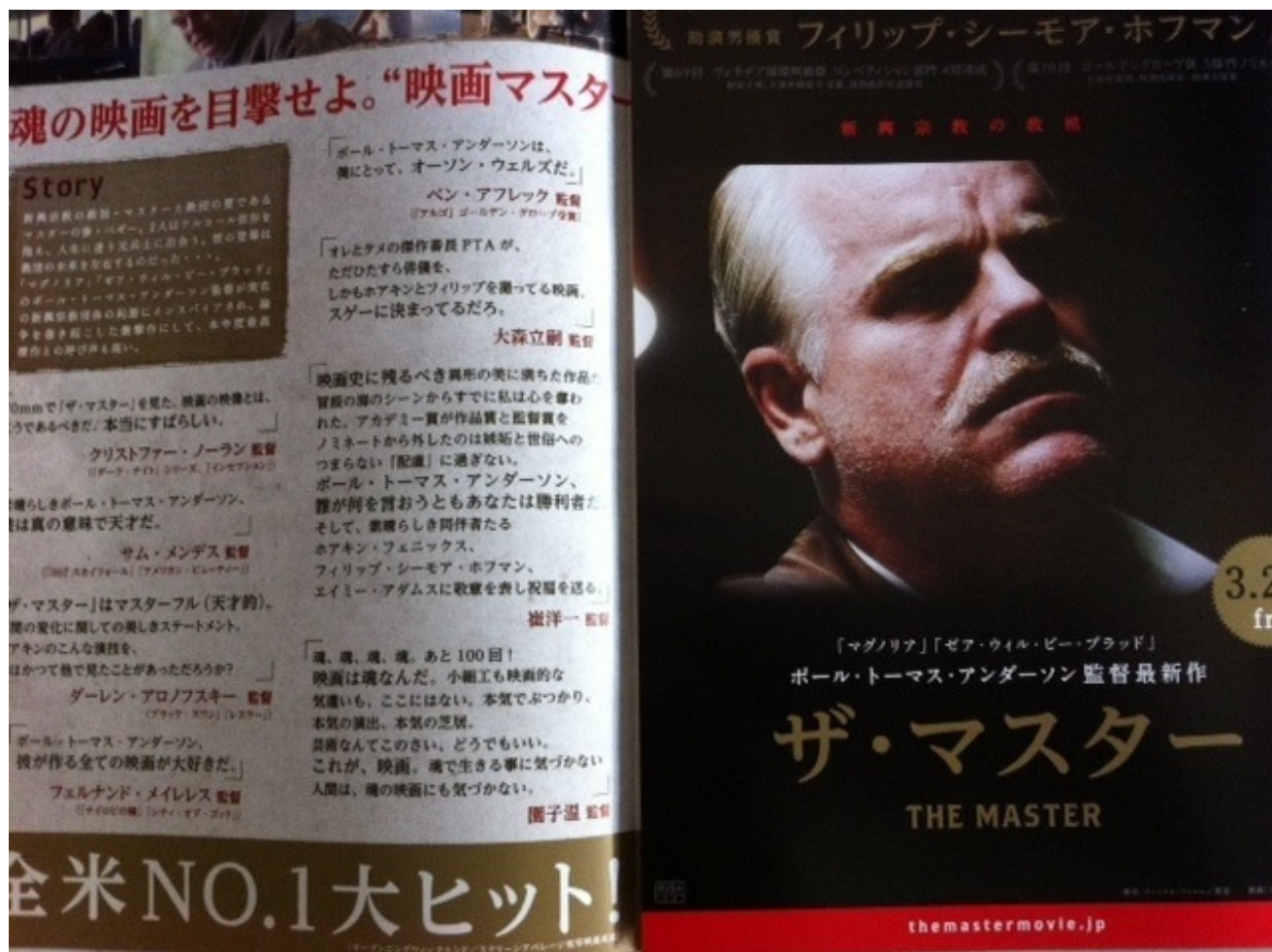
愛想笑いも振りまく。そこまではいいのだ。

だがどうにも肌に合わない客がいた。客には何も落ち度がない。ただ彼の方が一方的に、客に敵意を持ったのだ。

フレディは客をいたぶり、いじめた挙げ句、大げんかとなる。デパート内は大混乱。当然、出入り禁止となり職を失う。

他に色んな仕事をやってもみても、うまく他人と関われない。そんな時、たまたま心理療法セミナーを開いていたマスターと呼ばれる男に彼は出会う。

マスターは被験者をソファに寝かせ、いわゆる前世療法を施す。マスターは本も書いている。



これは結構売れていて話題になった。新聞記者も取材にやってくる。

「これは科学的じゃないと思いませんか？ カルトじゃないですか？」

との質問に笑顔でサラリ、とはぐらかしてみせるマスター。

彼の取り巻きはそんなに多くない。家族とごく少数の仲間達である。

決して大きな教団等ではない。

この作品は、主人公の眼からマスターを見る視点でつくられている。

マスターはあくまで紳士的だ。

決して強引に組織を大きくしようとはしない。

慈善事業のようにも見え、そのくせ富裕層との付き合いも大切にして、そのポケットから、さりげなく収入を得ているようだ。

このあたりの描き方がケレン味がなく、じつにうまい。

マスターの心の舞台裏、本音の部分を映画は敢えて見せようとはしない。

だからよけいミステリアスだ。

そこにこそ、マスターが人を惹き付ける魅力が隠されている。主人公はやがて「この人となら、どこまででもついて行く」ぐらいの気持ちになってくる。そしてマスターを独占したい様な衝動に駆られてゆく。

男が男に惚れるのは、本当にタチが悪い。

それはかつてオウム真理教の麻原の言葉に、多くの若者が心酔した図式に似ている。

オウムの若者達にとって、教祖麻原から声をかけてもらえた、ホーリーネームをもらった、教団内での位が上がった、なんて事になったら、それこそ羨望と嫉妬の的だ。

まるでオンライン・ネットゲームで、キャラクターの名前に変身し、どんどんレベルを上げてゆく、その感覚。

このゲームだけは他人に負けない、負けたくない、他人から認められたい、他人に自慢したい。

このゲームだけが自分の全てなのだ。

あまりにも世間知らずの、平凡で、いい子で、人を疑う事を知らない、素直な人ほど、こういうカルトにのめり込んでしまうのだろう。

本作は主人公フレディの安らげる、唯一の心の置き所が、マスターの存在そのものだったのだろう。

もちろん僕は思想、信条、宗教の自由は大切だと思う。日本国憲法はそれを認めている。

大切なのは、他人の考え方や、信じる事、価値基準が、それぞれ違う事を認める「懐の広さ」を持つ事だと思う。

違う大義で生きている人達もいるという事だ。

違う大義が衝突すると悲劇が生まれる事を、我々は既に体験している。

そこから何を学ぶのかである。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ポール・トーマス・アンダーソン

主演 ホアキン・フェニックス、  
フィリップ・シーモア・ホフマン

製作 2012年 アメリカ

上映時間 138分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=HVOWSsgtz4k>

2013年1月18日鑑賞

\*\*\*「男女逆転」二匹目のどじょうの行方\*\*\*

「これっておもしろいかあ？」というのが正直な感想でした。

大奥での男女逆転という発想は奇抜で面白い。それは第一作目で既に描いてしまったこと。続編を作る、第二作目を作るというのは、前回以上の目新しさと面白さがありますよ、ということでしょう。

第一作目は、実は僕は観ていない。予告編で観ました。二宮君のちょんまげ姿が絶望的に似合っていないかったので敬遠しました。

さて、本作は主役の將軍綱吉に菅野美穂、相手役が堺雅人にバトンタッチ。このキャスティングは僕のツボにはまった。これは観に行きたいと思いました。

脚本は誠実です。丁寧に描かれています。それは認めます。しかし残念ながら面白くも何ともないのです。この映画を一言で言い切ってしまうと、キャスティングの魅力、役者のネームバリューと演技力に頼ってしまった作品だと思います。

堺雅人が以前演じた時代劇、「武士の家計簿」をご覧になると良い。これはもう抜群に面白かったですよ。歴史学者である磯田道史氏の優れた原作、及び膨大な資料と正確な時代考証。これにより、当時、ソロバンで給料をもらっていたお役人としての武士の姿が、輪郭も鮮やかにクッキリと浮かび上がったのです。

堺雅人が演じる小役人。彼は細かいことは実に几帳面。何でも記録しておかないと気が済まない。律儀で真面目でいじらしい。

しかし、世の中の流れを大局的に観ることは苦手なのです。

原作者の磯田氏は言います。

「もう、悲しい程、現代日本人の原型がそこにあるんです」

さて本作に戻ります。

今回の大奥の見所はと言うと、やはり、映画ならではの豪華で、きらびやかな舞台装置であり、室内調度品の数々であり、身に着ける衣装の華麗さでしょう。

まさに「正月映画」興行にふさわしい、「眼の正月」を味あわせてくれます。

それにしても脚本の弱さが気になるのです。

將軍には男の子のを産む必要がありました。しかし、どうしてもダメなら他の徳川の分家筋から、次の將軍を引っ張ってくるという、最後の手段もあるのです。

それを何としてでも阻止したいと言う將軍の父親、桂昌院（西田敏行）と、他の徳川分家との確執をもう少し詳しく描いてほしかった。

そのため、どうしても男の子を産まねばならぬと言う、切迫感が観客に伝わって来ないのです。

また、大奥は日本国中から選りすぐりの美男で固められているはず。そこになぜ、宮藤官九郎が

御台所役として入っているのか？ 理解に苦しみますね。

もし自分が脚本家なら、と空想してみます。

女将軍である綱吉がもしも、同性愛者であったなら……。いやがる侍女を夜な夜な寢所に引き寄せ、いたぶり遊ぶ綱吉。（もちろん映画は18禁になりますけどね）側近中の側近である柳沢吉保もオンナであるから、これも「お手付き」にしてしまう。柳沢は毎晩のように寢所の傍らに待機している。そして綱吉の夜の女遊びを黙認する。

その心中、実は吉保は綱吉に恋心を抱いている。身分を超えた恋心。夜な夜な他の侍女に手をつける綱吉に柳沢は嫉妬する。

綱吉はたまに父親である桂昌院から絶世の美男子を世話してもらうが、綱吉はどうしても男を受け入れることが出来ない。

世継ぎを生まねばならないという切迫感と、それでもオトコを受け入れることが出来ない自分のカラダと心、その業、性に、綱吉は葛藤する。その姿を描く、というのはどうでしょうか？

前作の予告編を観る限りでは、大奥内の男性の同性愛、いわゆる男色、衆道についても若干、描かれている様なので、こういう設定もありなのではないかと……

以上私の戯れ言でございました。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 金子文紀

主演 堺雅人、菅野美穂

製作 2012年

上映時間 124分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

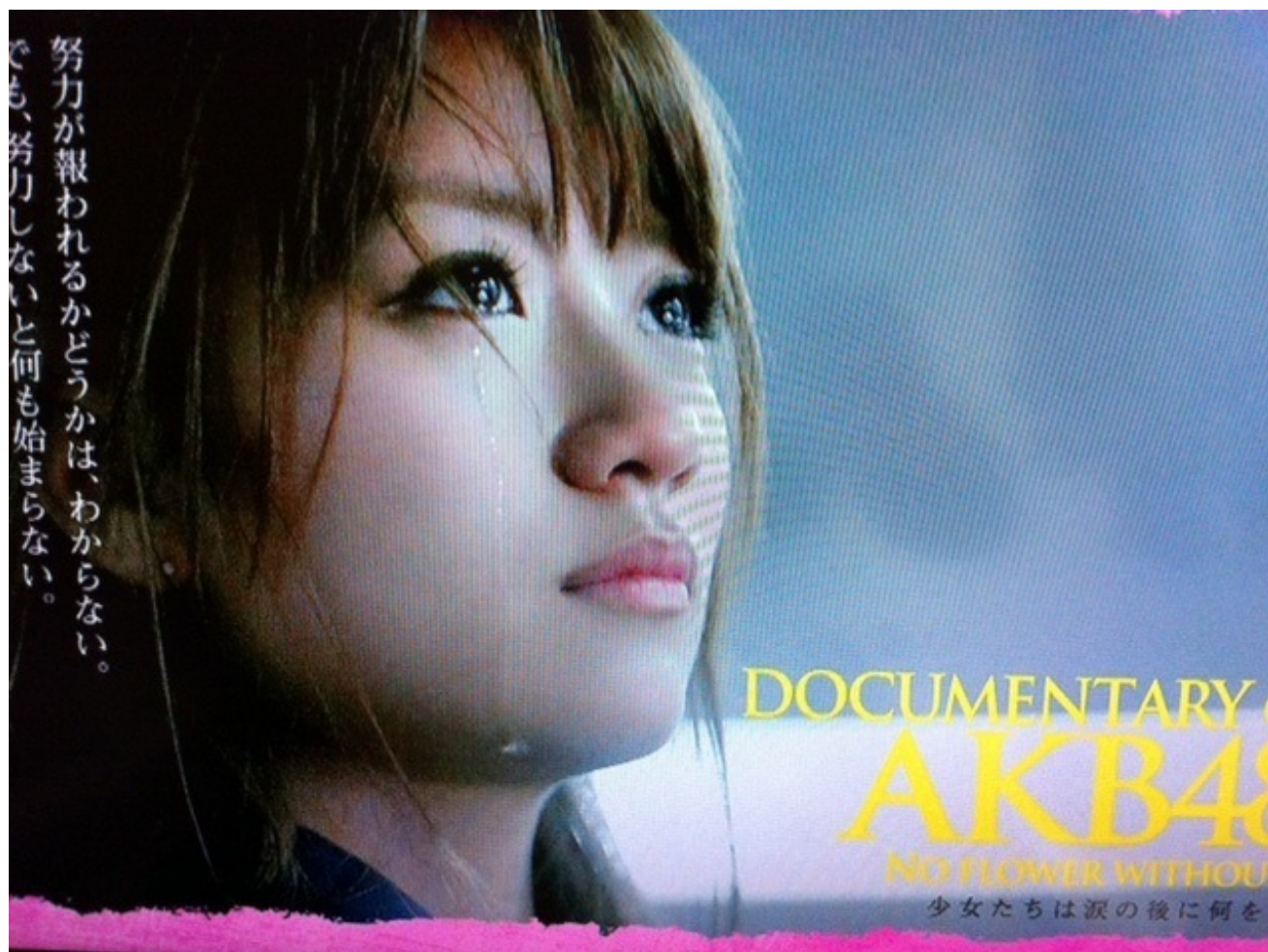
<http://www.youtube.com/watch?v=ueobrzJhBj4>



# DOCUMENTARY OF AKB48 NO FLOWER WITHOUT RAIN 少女たちは涙の後に何を見る？

2013年2月24日鑑賞

\*\*\*ブラックホールとしてのAKBシステム\*\*\*



それはステージの上に透明なテープで無造作に貼付けられていた。

「0番」「センター」と呼ばれる立ち位置である。

ここから見える景色は特別だ。横に仲間は見えない。誰にも助けてもらえない。目の前に見える景色は観客だけである。この位置に立つ者はグループの「顔」としての役割を与えられる。観客から最も近い距離で声援されるポジションであり、また、最も激しく「バッシング」されるポジションでもある。

そのポジションに七年間立ち続けたのが前田敦子という少女である。

アイドルグループAKB48において「不動のセンター」「絶対的エース」と言われ続けた前田敦子。ファンなら誰でも知っていることだが、彼女は運営側から命令されてセンターを務めることになった。当初は嫌がっていた彼女だが、何年もセンターを務めることにより、徐々に本人にも自覚が生まれていったのだろう。

彼女はやがて輝きを放ち始める。それはスタッフの想像さえ超える程の輝きだった。そして前田敦子と言うキラキラ光るダイヤモンドの虚像は一人歩きを始めた。それは求心力をもったダイヤ

モンドだ。



その前田敦子がAKB48からの卒業を発表する。さいたまスーパーアリーナでのコンサート。突然の卒業発表に、会場に居合わせたファンは、まさにこの世の終わりともまで思ったことだろう。会場は阿鼻叫喚の渦となり、さながら地獄絵図を思わせた。

AKB劇場公演最後の夜。彼女は秋葉原というひとつの街を、丸ごとパニックに陥れた。それ程の巨大な虚像であったことを前田敦子は証明した。まさにアイドルバブル状態の頂点に彼女は存在したのだ。

やがて「前田敦子」と言う名の「祭り」は終わり、ファンは次の「祭り」「次のセンター」をAKBに求める。

AKBというシステムは実に残酷なシステムである。アイドル、あるいはアイドルになろうとする少女達を競わせ、格付けし、順位を付ける。



それが多くのファンの興味と関心を湧かせ、巨大な集客マシン、集票マシンであることを、敢えてあからさまに見せ付けている。

AKBというシステムは「高校野球のようなもの」とプロデューサーの秋元康氏は言う。

バッターがボテボテの内野ゴロを打ったとしよう。アウトになるのは分り切っている。だが、それでも全力で一塁へ走り、ヘッドスライディングする。更には審判に「アウト！」と言われ、そのあとベンチに帰るときも「全力疾走」する。

これが高校野球に例えられる「AKBスピリッツ」なのである。

プロ野球は観ないが、春と夏の高校野球は楽しみにしているという野球ファンは多いと思う。僕もそのファンの一人である。

秋元康氏は「AKB劇場」という、アイドルのための甲子園を作った。

高校野球に独自の野球ルールがあるように、AKBというシステムにもルールがある。それが「恋愛禁止」という条例である。

2012年のAKBにおいて特筆すべきことは「恋愛スキャンダル」という「津波」に何度も襲われたことだ。

選抜総選挙4位と言う大躍進を遂げた指原 莉乃。会場となった武道館のステージ。彼女はまるで天国にいるかの様な気分になったことだろう。しかし、ある週刊誌は虎視眈々と狙っていた。彼女の恋愛スキャンダルは総選挙が終わった直後にスクープされた。

喜びは束の間。それは指原にとって正に三日天下だった。彼女は文字通り、天国から地獄に真っ逆さまに突き落とされた。

これはAKBにとって2012年最大の「津波」だった。しかし秋元氏と指原は、HKT48への移籍という形で、この難局を粘り腰で乗り切った。

だが、残念ながらこの津波に飲み込まれ、助からなかったメンバーもいる。

中でも、一期生の平嶋夏海の脱退は、運営スタッフ達にとって断腸の思いだったろう。

AKB発足時のメンバーでただひとり、ブレイクしそこなっていた平嶋。秋元氏も「今年こそ頑張れよ」と彼女にユニットメンバーの地位を与え、チャンスを与えていたのである。

しかし、その期待をスキャンダルと言う津波は、無常にも”木っ端微塵に”打ち砕いてしまった。デビューから彼女を陰で見守って来た劇場支配人、戸賀崎氏は泣いた。泣き崩れた。カメラは大の男が泣き崩れる背中、そのくやしさを冷徹に捉えた。

ドキュメンタリー作品としての本作は、過去のAKB関連作品の中で最も演出、編集が良いと僕は思っている。

何を見せたいのか？ という監督の演出意図が実に的確なのだ。

本作では特にコンサートでのバックステージに絞って、ドキュメンタリーが構成されている。そこにリアルで「ガチ」なAKBの姿がある。

高校野球や、宝塚歌劇は何十年と言う歴史を持っている。AKBというシステムもやがてそうなるのだろうか？

秋元氏が生み出したこの「AKBフォーマット」と呼ばれるシステムは、今や日本の重要な輸出品でもある。

日本国内における経済効果は今や300億は下らないといわれるから、外国政府にとっても巨大企業誘致に匹敵する、魅力的なシステムなのだ。それを思うと、このシステムは、そう簡単には破綻しないだろうと思われる。

AKBというシステムは常に自らの組織を発展的に壊し、再構築し続けている。そこには常にサプライズがある。近頃、最大のサプライズの噂がある。

「秋元康、本日をもってAKBを卒業します」という発表である。

その時、熱狂は終わるのだろうか？ それは当の彼女達AKBメンバーが最も関心を持っていることだろう。

さて、AKBは日本文化に何をもたらしたのだろうか？

秋元氏がゲリラ的に始めた秋葉原の小さな劇場。そこで歌い踊る少女達が日本文化の一部を切り取り、世界に向けて発信するまでになった。かつては一部のオタク的、隠れ家的な文化が、今や日本全土をカバーする、エンターテインメントの本流にまでなってしまった。ファンは増え続け、熱狂し、CD売り上げはミリオンセラーを連発している。もはや、日本国民全てがAKBを「知っている」状態になった。

「サブカルチャー」が「メインストリーム」に成り上がったのだ。

AKB選抜総選挙は、衆議院議員選挙よりも遥かに盛り上がる。

「AKBグループ総監督」といういかめしい肩書きを持つ「高橋みなみ」

高橋みなみは、一声でドーム球場50,000人の観客を黙らせることが出来る。総理大臣でもこれは出来ない。おまけに彼女は身長たったの148cm。まだ21歳という若さだ。まさに離れ業で

ある。ファンにとって小柄な彼女の声はまさに「神の声」なのである。  
秋葉原の小さな劇場でスタートしたAKB。初日の一般客はたったの「七人」だけだった。  
そのAKBというアイドルグループシステムが、まさかここまで肥大化し、大衆への影響力を持つ  
ことになるとは、誰が想像出来ただろう。

これはあくまで僕の個人的な感覚なのだが、ある種の嘔吐感さえ伴った「気持ち悪さ」を感じず  
にはいられないのだ。

それはあの悪名高い「ナチス・ドイツ」の集会とあまりにも似ているからだ。

そこには熱狂があった。大衆は安易に求心力を求めた。

いったいこの先、AKBはどれほどの熱狂と集中を生み出し続けるのか？

その気持ち悪さは、大衆と言う名の「頭のないバケモノ達」の意志のエネルギーを吸収し続ける

。

そしてあまりにも肥大化したエネルギーは、遂には日本文化そのものを飲み込んでしまう、ブラ  
ックホールになる恐れさえある。

そこにはもはや「未来と言う名の光」さえ飲み込まれる、暗黒の世界が待っている。

僕にはそんな風に思えてならない。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 高橋栄樹

主演 前田敦子、高橋みなみ、他AKB48グループ

製作 2013年

上映時間 128分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=ytl3cJJEIf8&feature=share>

# 100万回生きたねこ

2012年3月2日鑑賞

\*\*\*佐野洋子さんに謝りなさい\*\*\*

「100万回生きたねこ」がドキュメンタリー映画になる！！  
佐野洋子さんのファンにとっては、もう期待で胸が一杯になるはず。僕は「100万回生きたねこ」は一回だけ図書館で読みました。その時の記憶、飛んじゃってるんです。  
夢の中にいる様な感じで、自分が何を讀んだのか？ 何を体験したのか？ 読み終わってただ呆然としていたのです。



こんなすごいことが絵本で出来るんだ.....。  
そう言うことを教えてくれた佐野さん。  
僕はその後、佐野洋子さんの「ココロから」という小説を読みました。  
なんて幸せな小説なんだろう。  
なんて人を喜ばせる小説なんだろう。  
僕は今小説の習作を書いています。  
だけどうまく書こうとする程、全然書けない。  
佐野洋子さんはプロの小説家ではありません。

その文体はぎこちないし、技術的には正直、そんなにうまいとは思えません。

だけど「ココロから」という小説は、本職、プロフェッショナル、専門家としての小説家では成し得ないことをやり遂げています。

それは佐野さんの豊かな人間性に裏付けられた、人を見る視点、人を愛情を持って観察しているところから来ているのです。

その佐野さんが、このドキュメンタリー作品の監督に向けて放った最初の言葉。

「アンタ、何しに来てるんだっけ？」

佐野さんは見抜いていました。

「こいつ監督失格だ」と。

「アンタ何しに来てるんだっけ？」と言われた段階で、監督は気合いを入れ直し、ドキュメンタリーの構成を練り直す必要がありました。佐野さんの作品を観たり、読んだ方は分るはずですよ。

佐野さんは人間観察の達人なのです。

佐野さんは本作の監督を一目見て

「この程度の覚悟で来てるのか？」と見抜いたのです。

僕は400本程の映画を劇場で鑑賞し、いままで380本あまりの映画レビューを書いてきました。僕の好きなレビュアーさん等は1000本ものレビューを書いている方もいらっしゃる。たった380本のレビューしか書いてない僕が言うのもおこがましいのですが、380本のレビューを書いて来たから分ることがあるのです。

申し訳ありませんが、本作は全くの駄作です。

僕はあまりにひどさに途中退場しました。

何年かぶりの途中退場でした。

「ダメされた」とまで思いました。悔しかった。

この作品は映画を学ぶ学生の、卒業制作よりひどい駄作です。

ここまでひどい作品を観たのは初めてでした。

だからあえて、「駄作の見本」として映画レビューを書こうと思ったのです。

更に言えば、映画製作を志す人達に申し上げておきたい。

それは「気取るな！絶対に気取るな！！」ということです。

映画に限らず、創作の神様の前では、「創り手」は謙虚になるべきです。

本作で何より気になるのは、監督が、いっばしの映画作家であるかのような「気取った」姿勢をとっていることです。

幾ら隠そうとしても、その創作態度が作品から滲み出てしまいます。

映像作品の怖さはそこにあるのです。

例えば、全く意味のないカメラの長回し。

葬儀の後片付けを延々と撮る、その芸のなさ。

佐野さんの故郷へ女優を訪問させる。それはいいとして、何故、ただのがれきの山を、長い時間かけて観客に見せる必要があるのか？ 僕ならあそこはせいぜい5秒ぐらいのカットを3、4カ

ットつなげて編集し、そのシーンを終わりにするでしょう。

それを意味もなくダラダラ、ダラダラ、さも意味があるかのように見せかけて女優を歩かせている。そこに監督の「映画作家気取り」があるのです。

観客は佐野さんの創作の秘密を知りたいのです。

観客は佐野さんの生の人柄を知りたいのです。

だからお金を払って観に来ているのです。

監督は観客が何を観たいのか、それを全く無視したとしか思えません。

監督がすべきことはまず、佐野さんのお墓に行って、花を手向けてください。そして謝ってください。

きっと天国の佐野さんはこういうでしょう。

「アンタ、何しに来たんだっけ？」

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆

配役 ☆

演出 ☆

美術 ☆

音楽 ☆

総合評価 ☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 小谷忠典

主演 佐野洋子、渡辺真起子

製作 2012年 アメリカ

上映時間 91分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

[http://www.youtube.com/watch?v=Pn\\_GVSC\\_CUs](http://www.youtube.com/watch?v=Pn_GVSC_CUs)



2013年3月14日鑑賞

\*\*\* 新しい家族「ニッポン」の家族 \*\*\*

故郷の島から父、周吉（橋爪功）と母、とみこ（吉行和子）が東京にやって来た。息子や娘達は皆、東京で暮らしている。久しぶりの親子水入らず。微笑ましい光景。とっていたらそうでもないのだ。



長男、幸一（西村雅彦）は開業医だ。医学博士号を持っている自慢の息子である。父母を東京見物に連れて行こうとするが、そこへ急患の電話。やむなく東京見物はキャンセル。

「これも息子が立派に仕事をしているからだ」「シカタガナイ」とあきらめる父母の姿。

長女（中嶋朋子）は下町で美容院を経営している。

従業員には「先生」と呼ばせているが、いかにも下町のパーマ屋さん、床屋さん、という雰囲気のお店では、かえって「滑稽」だ。

長男も長女も、長旅の末に東京にやってきた父母の相手をする暇もない。

長女などは

「町内会の会合もあるし、やること一杯あるのに、なんでこんな時にわざわざ来るのかしら」とあからさまに愚痴を言い始める始末だ。

だったら、いっそのこと父母をホテルへ押し込んでしまえばいい。自分たちも泊まったことのないような高級ホテルなら、父母も不満はないだろう、と父母をホテルへ泊まらせる。

だが、父母としてはホテルの部屋から見える100万ドルの夜景も、食べ慣れないフランス料

理も、ふっかふかのベッドも、慣れないことばかりでどうにも落ち着かない。疲れは溜まるばかりだ。

さて、父母が一番気に掛けているのが次男、昌次（妻夫木聡）である。舞台美術の大工仕事を手伝っているが、安月給で生活は不安定だ。

「それで食べていけるのか？」

父は心配そうに、半ば怒ったように、あきれたように問いかける。

昌次は好きになった物にはまっしぐらな性格。だから、フィアットのチンクチェントなんて言う、イタリアのポンコツ・ミニカーに一目惚れして買ってしまったりする。

三人兄弟の中で最も頼りないと思われている。

だが昌次には恋人がいた。親兄弟にもまだ知らせてないが、結婚するつもりだ。

母親とみこは「どうせ昌次の部屋は散らかってるだろう」と思い、彼の部屋を片付けに来てくれる。ちょうどいいタイミングだ。昌次は母に恋人、紀子（蒼井優）を紹介するのだった。

東京では何とも「居心地悪いなあ〜」と思っていた父母。

「そろそろ島へ帰ろうか」と思っていた時に現れた、昌次の恋人紀子。母親にとって紀子は希望の光のように見えたことだろう。



家族の最小単位は夫婦である。

目の前に「新しい家族」が今生まれようとしている。

そのきっかけをつくったのは皮肉にもあの「3：11」だった。

山田洋次監督は小津オリジナル版にない設定をここで取り入れた。さりげない日常の風景。幸せそうな恋人達。

そこにある「3：11」と言う「ニッポン」の「現在進行形」の出来事。

2011年3月11日以降の平凡な日常生活。敢えて平凡さを描くことで、日常生活の中に、当たり前前に刻み込まれた震災という傷跡。

それは既に意識のキズとしての血は流れていない。

大衆の意識のカサブタも、とうに取れてしまった。

かすかに残った傷跡。それを抱えて生きる市井の人々。

全くヒーローなど登場しない。

全くドラマチックでもなんでもない暮らし。

でも日常生活を送る僕たちの意識の傷跡は消えることがない。

それを敏感に感じ取った山田監督は、その空気感を、そっと作品に忍び込ませた。さりげない演出、脚本はいかにも山田洋次監督作品らしさに溢れている。

\*\*\*\*\*

さて、ここから余談。

本作は言うまでもなく小津安二郎監督の「東京物語」へのオマージュとして制作された。

しかし、小津監督独特のあの畳縁より低い位置からのカメラアングルは使われていない。

あくまで山田洋次監督オリジナルのカメラ目線で撮影されている。

ちなみに、年老いた親が息子達を訪ねて行って、つれなくされる、というストーリー。

どこかで読んだぞ、とっていたら、ふと気がついた。

シェイクスピアの「リア王」

そのストーリーの一部分なのである。

もちろん「リア王」には「遺産を巡っての親兄弟のドラマ」という重要なポイントがある。これは時代を超えた、人間にとって「永遠のテーマ」になりうる問題だ。

だから、シェイクスピアは現代でも読まれているし、演劇、映画などで度々リメイクされている。その人間を描く芸術の命は失われていないのである。

あくまで僕の推測だが、もしかすると小津監督も「リア王」のモチーフを取り入れてみようと思ったのではないかな？

きっと黒澤監督は「東京物語」をみたことだろう。

そして自分なら「リア王」をこう撮る、と思い「乱」をつくったのではないかな？

「静的なリア王」が「東京物語」であり「動的なリア王」こそ「乱」なのではあるまいか？

それはまさに映画界に流れる巨大な潮流の激突であったのだ、といまになってようやく気づいた。

\*\*\*\*\*

オリジナル版「東京物語」

小津安二郎監督の傑作と言われている。

2012年イギリスの映画協会でも10年に一度選出される「世界ナンバーワンの傑作映画」に選ばれた。

僕は観たことがなかったので、DVDを借りて観た。

30分我慢出来なかった。断念した。

自分でも信じられないことだった。

自分には映画の鑑賞力がないのだろうか？

自分にはこの作品を受け止めるだけの豊かな心がないのだろうか？ ちょっとショックだった。

若き日の今村昌平監督はかつて「小津組」のスタッフの一員として働いた。だが、今村氏は「もうこりごりだ」と「小津組」を逃げ出した。そして自分で映画を創り始める。

そのとき、すでに巨匠と呼ばれた「小津監督」から言われたそうだ。

「お前達、なんで”ウジ虫”ばかり撮ってるんだ？」

そう言われた今村昌平監督は一大決意をする。

「よし！！ 俺は一生”ウジ虫”を撮ってやる」

やがて今村昌平監督は「楢山節考」でカンヌ映画祭最高賞「パルム・ドール」を受賞。世界的評価を浴びる。

小津監督の作品と、僕達が今見ている映画作品は、明らかに映画文法が違うのである。

それは日本の古典音楽である「雅楽」と「J・POP」ぐらいに違う。

小津監督は畳と障子で作り上げられた和室に代表される、端正な日本的美意識の結晶の様な映画だ。

日本間、和室、床の間、を写真に撮って、スライドショーをやっている様な雰囲気がある。

対照的にチャップリン、エイゼンシュテイン、ジョン・フォード、クロサワ、スピルバーグという流れを汲んでいるのが現在の映画文法である。

そこにはなにより「アクション」がある。

小津映画は「静的」である。今僕らが見ている映画は「動的」な映画だ。

今、若者に雅楽や能などを見せて「これが日本の伝統文化だよ」と紹介しても、僕を含めてポカァ〜ンとしてしまうだろう。

「これどこの国？」

もうぼくたちにとってそれは1000年以上前の「ジパング」でしかない。

そんな「古き良き日本の心」を探りたいと思っているのは、意外にも外国の人達であったりする。

日本の古典文学を世界に紹介したドナルド・キーン氏などはその草分け的存在だ。日本の心や芸術を学びたい、と関心を持つ外国の人は多い。彼らにとって「ニッポン」はエキゾチックでドキドキする不思議の国なのだろう。新しい日本人像の種は、そういった好奇心おう盛な、外国の人の豊かな心の土壌で花開くのかもかもしれない。

海外の小津安二郎監督人気を見て、ふとそんなことを感じるのである。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 山田洋次

主演 橋爪功、吉行和子、妻夫木聡、蒼井優

製作 2012年 日本

上映時間 146分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=VQjiqxx3rNw>

## 図書館戦争

2013年5月13日鑑賞

\*\*\*発令する、図書館を死守せよ！\*\*\*

命がけで本を書く人は多くいる。命を削るようにして本を書く。

たとえ売れない、一般受けしない、とおもえても、書くべきだと判断すれば作品を書く。本当の作家とはそういう人たちだ、と僕は思う。

では命がけで本を守る人はいるだろうか？

僕は紙の本が好きだ。

今や電子書籍が当たり前になった。

もちろん僕も電子書籍は利用している。

読むだけではなく、自分で雑文を作り、電子書籍サイトで公開もしている。

「しかしなあ」と思う。

やっぱり紙の本は特別なのだ。

一冊の本を手にとってみる。

その表紙の手触り。ズシリとした重みは、まるで作者が込めた想いが伝わってくるようだ。

そして、ページをめくる時のかすかに感じる紙の香り。

正に紙の本は、それ自体が、人間の五感を刺激する、エキサイティングな芸術作品だと思う。

もちろん僕と同じように感じておられる方は多いと思う。



本作はそんな「紙の本」を愛して止まない人達のために、紙の本と図書館を守る人達を描く。

このお話は権力側が検閲を行い、読んではいけない本を決め付け、回収するという、いちおう架空の世界でのお話だ。

（もちろん歴史をひもとけば、日本だって検閲をバンバンやっていた。現在でも教科書検定は検閲ではないか？という議論はある）

検閲に引っかかった本を回収するためには、実力行使も辞さない。ドンパチだってやる。かなり過激な設定だ。

おもしろいのは、同じ国内でありながら、別の組織もあることだ。

図書と図書館を不当な弾圧から守る、図書館と読書の自由の番人。それが「図書隊」だ。

彼らは本を読む自由を守るために命を賭ける。「図書隊」も本を読む権利を守るためには武力行使も辞さない。

ただし条件がある。

「専守防衛」である。

敵が先に討って来ない限り反撃出来ないのだ。

フフフ.....

まあ、明らかに自衛隊や、日本国憲法等をモチーフとしているのがわかる。

この作品、残念ながら脚本がイマイチだ。無駄でゆるいシチュエーションもあって、はっきり言って脇が甘いなあ～。

ヒロインの榮倉奈々が、やたらと上官に反抗したり、命令無視、越権行為をするのも言語道断でしょ？



このお話は有川浩さん原作。

この人はミリタリーオタクだと噂で聞く。ならば、この作品のよりどころとなる、自衛隊の行動規範等を守って、脚本作りをするべきだろう。

民間企業でもそうだが、自衛隊のような軍に準じる組織ならば（実質、自衛隊の規模、装備は明らかに軍隊である）上官の命令は神の声であり、絶対だ。

上官に意見具申したければ許可が必要である。

それを全く無視しているのが、防衛組織としてのリアリティに欠け、ストーリーに締まりがないのだ。

仮に、あなたが「図書隊」の隊員だとしよう。

あなたは図書館を守りたい。

今、まさに戦闘行動中だ。

しかし、上官の命令が気に食わない。そこであなたは自らの判断で、9mm機関けん銃、通称「エムナイン」を手に、敵に華々しく突撃する。

その結果、無謀な突撃をしたあなたを守ろうと、他の同僚が死傷したらどうなるか？

誰が責任を取るのか？

実は「命令を下す」という行為は、部下の命を左右しかねない、極めて重い責務なのである。

だから命令した者はそれこそ「ハラキリ」覚悟で命令する。

全責任は「発令者」にあるのである。

映画も同じである。

「監督」は映画製作の全責任を負うのだ。その覚悟があるからこそ、自分より年齢も上で、大ベテランのカメラマンや、照明、録音、美術、音楽等の熟練スタッフに「発令」し、無理難題が言えるのである。

さて、本作の見所は、やはり終盤、特務機関と図書隊との銃撃戦。そして、岡田准一氏のキレ味鋭いアクションシーンである。

ジャニーズ・タレントを舐めてはいけないのだ。実際、彼は数種の武術の免許をもっているそうで、このシーンは見逃せない。

この作品は、紙の本を命を賭けて守りたい。そんな本を愛する人達のために作られている。もちろん原作の有川浩氏も紙の本が大好きなのだろう。

未来ある子供たちに、素晴らしい紙の本を届けたい。そんな想いが一杯詰まったこの作品。その根っこに流れる「こころざし」の高さは、正當に評価されるべきだと僕は思う。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆☆

映像 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆



総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 佐藤信介

主演 岡田准一、榮倉奈々、石坂浩二

製作 2013年

上映時間 128分

予告編映像はこちらのアドレスをコピーしてお使い下さい。

<http://www.youtube.com/watch?v=UJpZfBH5M2k>

## 映画に宛てたラブレター 2013

<http://p.booklog.jp/book/67316>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67316>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67316>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ